

知られざる郭沫若の諸事について(5) 【サマリー】

齊藤孝治

「知られざる郭沫若の諸事について(5)」は、抗日戦争最中(さなか)に於ける郭沫若を巡る様々な状況について描いたものですが、サブタイトルにある——名家の姉妹たち——は、于立忱、于立群、于立修との関わりを指しています。

彼女らは清朝末期、辛亥革命により失脚の末、没落した高級官僚の末裔で、于立群は縁あって郭沫若の三番目の妻になったのです。二人は 24 歳という歳の差があったにもかかわらず、睦み合い、漢英、庶英、世英、民英、平英、建英の順に 6 人もの子供をもうけました。文字通り「琴瑟相和す」(きんしつあいわす＝夫婦仲のよいたとえ)だったのです。

ちなみに郭沫若は于立群宛ての手紙を書いたり、メモを残したりする時、自分のことを必ず「貞より」と記していた、といいます。「貞」は郭沫若の本名「郭開貞」より取ったものです。

二女の庶英は、両親について「母は父の方が年上だった上に学識の面で父と差や距離がありました。しかし母は父のよき助手になろうとただ一心、自らに努力を課し、常に進取の精神を持ち続けました。父もそうした母の人となりや、汚濁に染まらない気質が分かり、愛していました」と述懐しています。

二人は抗日戦争中という特殊な条件下で結ばれたとはいえ、終生、よき伴侶であったと思います。

その郭沫若も 1978 年 6 月 12 日、15 年間にわたる于立群との結婚生活に終止符を打ち、永眠されたのです。享年 86 歳と長寿でした。

しかしながらその死は、文化大革命の際、本人が 4 人組にいろいろ痛めつけられただけでなく、北京大学生であった世英が紅衛兵に殺害されたり、海軍の軍人だった民英が自殺したりした心の傷が少なからず影響したに違いありません。

郭沫若の死は、于立群にとって非常な衝撃であり、耐えきれなくなった彼女は、8 か月後、自ら命を絶ったのです。享年 62 歳でした。

一家が住み慣れた北京の故居には、家族が「媽媽的木」(ママの木)と呼んだ銀杏の木が 10 本、時が経つのも忘れたかのように今も葉を茂らせています。